

---

# 【織斑一夏に憑依か……せめて強く生きていく】

とある世界の思春期男子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【織斑一夏に憑依か……せめて強く生きていこう】

### 【著者名】

ZZード

N1388Z

### 【作者名】

とある世界の思春期男子

### 【あらすじ】

神のミスで死んだ少年がエスの世界で主人公に憑依し、強く生きようとしながら生活をしていく。そんな物語です。

## 第0話 一つの決意（前書き）

「ひつや」とある世界の思春期男子です。  
なるべく長く続けるよう努力しますので温かい田で見守ってください  
ればと思います。

尚基本駄目文ですので、『いいはいいした方がいい』といったよ  
なアドバイスも下されば嬉しく思います。

## 第0話 一つの決意

「よく来たのぉ、お前さん」

今俺の身に起こっている事を有りのまま話そつ。  
何か知らない間に変な空間にぶつ飛ばされてて  
何か変な爺さんが急に眼の前に現れた、以上。

「変なとは何じゃ。 失礼な奴じやのう」

人の心を読むなよ爺さん。

変な状況下にいきなり叩きこまれた上に見た目がいかにもどつかの  
仙人みたいな変な爺さんに遭遇したとなればパニックを起こして変  
な宇宙語喋るかもしけないだろ。

それと心読めるんだつたらもう俺喋らなくていいよな?  
喋ると俺のゲージがどんどん減つていくからさあ。

「別によいが、ちと年上に対する敬意が足りんのう。 ワシは神  
じゃぞ」

初対面の人物に対してあんたもちょっと失礼じゃないのか。  
つていうか神様だつたらそんな細かいことぐらい見逃せや。  
まあ別にそれはいいよ、それよりも聞きたい事があるし。

「じつてどこ? 地獄?」

「天国。 お主はさつきトラックに轢かれて死んだんじゃよ

ふへん……俺さつき死んだんだ。

そういうえば何か記憶の最後にトラックが突っ込んでくる映像がある

な。

うわ、俺頭の中身がザクロみたいに豪快に飛び散つてるし。  
こんなグロい映像パソコンでも中々ないんじゃないか。

「ほお……お前は慌てんのじゃのう」

慌てたところで一体何が変わるっていうんだよ。

それに、別に俺自身は死んだ事を後悔なんかしていない。  
あの時小さい子供を守るために俺は飛び出してトラックに轢かれた。  
でも小さい子供が来てないってことはまだ生きてるってことだ。  
それだけでももういいよ。

「それがワシのミスじゅったとしてもか？」

ミス？ 神様でもミスするのか？

まあ別にいいよ、もう俺の件に関してのミスは。  
ただこれからはミスに気を付ける事を約束してくれ。  
絶対に俺みたいにミスで人を死なせてしまわないと。

「……気にいった。 お前に第一の人生を『えてやろう』

いきなりキャラと口調変えてんじゃねえよ爺さん。  
ていうか明らかキャラや口調と共にボイスも変えただる。  
声が何のつもりかは知らないがBASA RAの織田信長になつてた  
し。

「え、第一の人生だつて？」

「どうことだよ爺さん、俺を異世界にでも飛ばすのか？」

「勘の方も中々鋭いな。 ますます気にいった」

だからその第六天魔王のボイス止めてくんない。

本人じゃないと分かってても怖いんだよ。

今日寝た時夢の中に出できたらどうしてくれるんだよ。

……死んでるから寝る必要も無いか。

「まあ一旦落ち着いて聞け。お前には逝つてほしい世界があるんだ」

真面目に話してくれるのはいいが漢字が違う。  
この場合は『逝つて』じゃなくて『行つて』だ。  
それと俺は落ち着いているだ。

「そりゃいい。じゃあいつで。お前行つてほしい世界、それは……」

溜めるな、さっさと言え。

「……………E.S. つまりインフィニット・ストラトスの世界だ」

インフィニット・ストラトス。

確か今年の初めぐらいにアニメ化したやつだろ。  
でもあれって主人公女垂らしじゃ無かつたか？

「女垂らしではないが、朴念仁ではあつたぞ」

出来れば行きたくないな。

行くんだったら原作沿いにはするんだろ、嫌でも。  
あれちょっとだけ見てたけど死亡率結構高いぞ。  
主人公は補正がかかつてたから死ななかつたが。

「だったらいい方法がある。憑依だ」

憑依って他人の肉体に魂が取りつくつてやつか。  
話の流れからすると俺が主人公の体に憑依する流れだな。  
だったら俺はイエスとは言えない。

「何故？」

だから言つただろ。死亡率が高いって。  
それにあの主人公のIS……確かに白式だつたか？  
あれ弱すぎるし、何より主人公に合つてない。  
ギブが100だつたとしてもティクは70ぐらいでつりあつてない。

「そこは安心しろ。この神の力で何とかしてやる」

どうしてもあんたは俺をISの世界に行かせたいらしいな。

「やつてもらいたい事があるからだ」

何をやらせる気だ？

世界征服……いや、あんたの事だから原作ブレイクとか言いそうだ。

「まさかそれまで当てるとは」

合ってるのかよ。

やっぱりお前の事尊敬できないわ。

せいぜい神つて立場がすごいと思える程度だ。

「うむやこ。…………お前にはMSを『』えてやる

我が儘貫き通して拳句の果てにはガンダムをE.Uの世界にブチ込むのかよ。

あれとE.Uが戦つたら絶対にガンダムが勝つに決まっている。しかしそれだと原作ブレイクよりも世界征服のルートに入るぞ。いいのか？一応ブレイクと言えばブレイクだが。

「誰が1数メートル越えのままE.Uの世界にブチ込むと言った。確かにMSをお前」と送るには送るがちゃんと大きさぐらいは合わせる」

……良かつたよ、お前が一応その程度の常識を持つてくれていたことは。

でもこの展開だとあれだろ。

俺が使いたいMSは選ばせない氣だろ？

「何を言つている。くじ引きで決めるに決まつていいだろ！」

せめて送つてくれる世界もくじ引きで決めさせいや。後何速効で部下にくじ引きを作らせてんだよ。

自分でやれや、何でもかんでも部下に頼むな。

「うるさい。ほれ、出来たからくじを一枚引け」

一枚？

ガンダムを俺に一機くれるのか？

「サービスだ。お前は本来死ぬべき人間ではなかつたのだから」

はいはい、ありがとうございます。

取り合えず俺は神様の言つ通り一枚のくじを引いた。

さて、一体どんな機体が書いてあるんだ？

……ストライクフリーダムにダブルオーライザー……  
どちらもチート級のヤツじやないか。

「あ～そのくじ無し。面白くない」

確かに俺以外の奴だつたら選びそうだがよ。  
さすがに面白くないの理由でくび引き無しにするの止めて。  
俺今当たり引けたから結構嬉しかったんだよ。  
ダブルオーライザー好きだつたから嬉しかったんだよ、俺。

「いいから引け！ 次にまたいいのを引けばいいだろ？！」

……頼むからザクとかドムはこないでくれ。

そう念じながらまたくじを一枚引く。

今度は一体何を引いたんだ俺。

……ウイングガンダムゼロに ガンダム……

一応ウイングゼロは主人公機だが…… ガンダム？

そんな機体あつたか？ 僕知らないぞ。

「それはアムロ・レイが乗つっていた機体。 強いぞ」

だつたらしいや。

これで俺はE.Sの世界に行かなきやいけないんだろ。

朴念仁の主人公に憑依して原作開始しなきやいけないんだろ。

「待て待て。 まだ特典が残つている」

お前はとことん原作を壊したいらしいな。

「そうじゃない。 ガンダムは『ユータイプしか使えない』

だつたら憑依した後ででも俺を『ユータイプにすればいいだらう。なんでわざわざ止める必要もないのに止めたんだよ。構つてほしいのか？

「そこまで孤独ではない。 お前、単一仕様能力はどうするつもりだ？」

「いらないだろ？そんなの。

ガンダムの性能舐めるなよ、しかも主人公機。

「いいから何か言え。 叶えてやる」

つて言われても俺は困るんだけどなあ。

正直ウイングゼロは機体があるってことしか知らないし ガンダムは今知つた。

機体が何を重視に作られているかが分からないと始まらない。

……待てよ、これならいけるかもしれない。

なあ神様よ、ウイングゼロと ガンダムよりも上の機体つてあるか？

「ウイングガンダムゼロならウイングガンダムゼロカスタム。 ガンダムなら？ ガンダムがあるがそれがどうかしたのか？」

じゃあ単一仕様はそれにしてくれ。

单一仕様を使つたら今言つた機体になるようだ。  
あんただつたら出来るだろ？

「出来るには出来るがそれでは四機になるぞ」

もうそれぐらいしか思いつかないんだって。  
頼むよ神様、最後ぐらい願い聞いてくれや。  
そんなに無理な注文してないだろ。

「……………おぬ二二。」

ありがとうございます。

「……………あ、それじゃあ、逝っていい！」

……ん？ 何か今足元からパカツて音が……

「気を付けて逝つてくるんだぞ」

そして俺の意識は完全に途絶えたとさ、チャンチャン。

次に俺が目を覚ました場所、そこは病院。

頭には何やら包帯もわんさか巻かれて点滴も刺された。

主人公の記憶を辿っていくと何故病院にいるかその原因が分かつた。小さな子供がトラックに轢かれるのを阻止するために道路に飛び出して子供を守り、代わりに自分がトラックに撥ねられた。

……何故だらう、俺と境遇が全く同じだ。

しかも小さい子供っていうポイントもまた一致している。ここまでくればもはや嫌がらせの域だな。

「……一夏、目を覚ましたのか」

色々とショッキングな事があつて気がつかなかつたがこの人がいた。世界最強と主人公の姉つていうのは覚えてるんだけど名前が出てこない。

つていうか主人公の名前つて一夏つていうのか。

「……俺つて一体何があつたんですか？」

一応分からぬという風に聞いておこう。

俺は自分が事故で轢かれたという事実を知つてゐる。

ならばここは記憶喪失と言うのが一番いい。

……この人には悲しみを与えてしまうだけだがな。

「お前は道端に飛び出した子供を庇つてトラックに撥ねられたんだ。医者の話では思つたよりも怪我が酷くなつたから数日もすれば退院できるらしい」

「そうですか。ところで、一つ聞いてもいいですか？」

「何をだ？ そもそも一夏、何故今日はそんなに他人行儀なんだ？」

「あの……俺、あなたのことが誰なのが分からんんですけど」

その言葉が放たれた瞬間確実に俺達の空気が死んだ。  
この表現は間違ってはいない、今、確実に死んだ。  
彼女にとつてはショックが大きすぎたのだろう。  
目を大きく見開いたまま固まってしまっている。  
やばい、罪悪感がかなり沸いてきた。

「う、嘘だよな一夏。『冗談……だよな』

「すいません。本気であなたが誰なのが分からんんです」

申し訳ないといった顔をして謝る。

俺はこの人から一つの宝を奪ってしまった。

何よりもその事実が俺の全身に重くのしかかる。

「あ、でもこれだけは分かります」

「…………何がだ？」

「何故かは分かりませんけど今の俺にとつてあなたはとても大切に思えるんです。何か……家族のような強くて温かな温もりが」

その言葉を聞いた瞬間主人公の姉は俺に抱きついて泣きだした。  
大声だけは上げずに噛み殺していたが、それでも小さな嗚咽は漏れている。

その綺麗に整つた顔の頬に涙が伝うのが見えた。

「生きよう、織斑一夏の分まで。

せめてこの人を安心させられるような強い人間になろう。

それが今の俺に出来る償いだと思えるのだから。  
俺はこの時、心にそう強く誓つた。

## 第1話 訓練前（前書き）

多分10～15話くらいまでは原作前の話になるかと。  
気長に見てもらえれば光栄です。

## 第1話 訓練前

俺がI.Sの世界に憑依してから一週間が経過した。  
肉体の方はもう全然問題が無いらしく今日退院。

今は千冬姉さんと一緒に自宅に向かっている最中だ。  
彼女がそう呼べと言つてくれたから千冬姉さんと呼ばせてもらつて  
いる。

ちなみに俺の事は見事に記憶喪失という判断が下された。

何種類か治療みたいなを受けたがもちろん結果はしりて  
リハビリなんかも行つてはみたものの結果はやはり変わらない。  
当たり前だ、記憶なんか端から無くなつていない。

俺が織斑一夏の肉体や精神を乗つ取つてしまつたのが原因なのだから。

医者からもう一度と記憶は戻らないかもしさないと言われて、千  
冬姉さんが涙を流しているのを見た時なんか自殺しようかとも一瞬  
考えてしまつた。

しかしそれは絶対に許されない選択。

たとえ強制だろうが何だろうが俺は織斑一夏の人生を奪つてしまつ  
た。

そして千冬姉さんをひどく悲しませてしまつて  
いる。

これは今更換える事の出来ない事実だ。

だったら俺はひたすらに強く毎日を生きなければならない。

千冬姉さんが安心してくれるぐらいたくましく生きなければならな  
い。

それが今の俺に出来る唯一の事だから。

「一夏、着いたぞ」

「え……あ、すこせん千冬姉さん」

「……辛いか?」

無理やり笑っているような顔で尋ねられた。

その瞳は赤く腫れており瞼のところにもうすら涙がある。かなり疲れがたまっているのか顔もかなりやつれているのが分かった。

……もうひとなに無理をさせてしまっているのか、俺は。罪悪感で押しつぶされそうになりながら必死に返答を考える。

でもこい返答が思い浮かんでこない。

下手な事を言って千冬姉さんを悲しませたくない。

そつ考えれば考えるほど答えが無くなっていく。

……いや、違う。答えが出てこないんじゃない。

俺が答える事を無意識の中に恐れてしまっているんだ。

無意識の中に悲しませたくないと思いつ返答を恐れてしまっている

んだ。

何か言わなくてはいけないと思にながらも言えない。

我ながら少し泣き声になってしまつ。

「いえ……千冬姉さんの方がもつと辛こはずです」

結局そつ返すのが精いっぱい。

千冬姉さんは何も言わずに手招き。

どうやらもう家の中に入ろうというサインらしい。

これ以上迷惑をかけたくない俺は素直に従う。

そして、一夏の自宅に入った。

初めてこの家に入ったというのに妙な懐かしさを感じる。

やはり肉体が自然とそう感じ取っているのだろう。

しかし肉体が懐かしいと感じれば感じるほど罪悪感は増していく。

……ダメだ、今からこんなに弱気では。

「…………」

「…………」

「…………」

お互いの間に言葉が生まれない。  
この状態では仕方ないものがあるかもしれない。

「すいません千冬姉さん。 自分の部屋に行つてきてもいいですか？」

？

「…………ああ。 一階に上がつてすぐの所だから分かるはずだ」

「有難うございます。 それと、少し寝てください。 疲れてる  
はずです」

「…………そうさせてもいい」

それ以上の会話が行われる事は無かつた。

どうすればいいのかが分からぬ。

ただただ俺は一人になりたかった。

「のままだと千冬ちゃんの前で泣いてしまいかねないからだつた。

一夏の部屋の中に入るとベッドに仰向けて倒れ込む。  
別に眠るわけではない。これからある人物に話があるのだ。

「……爺さん、聞いているんだろ?」

『バッヂリだ。そして何か用か?』

「单刀直入に聞く。ガンダムはどこにある?」

『お前の机の前にある机の引き出しの中に入っている』

爺さんの言葉通り一つのペンダントが引き出しの中に。  
多分赤い方がウイングガンダムで白い方が ガンダムだな。

「俺の体はもう一コータイプになつているのか?」

『当たり前だ』

らしい。

しかしこれはかえつて好都合だ。

今の俺にはどうしてもしなければならない事があるからな。

「あんたに折り入つて頼みがある」

『何だ?』

『この家の地下に今から俺の訓練のための場所を作ってくれ。もちろん完全に音が漏れないようになると壁は絶対に壊れないようにするのも忘れないで。それと常に俺の使用していない機体が相手になつて出てくるようになると千冬姉さんでも勝てるかどうか分からぬいようなレベルにしておくのも追加注文だ』

『……死にたいのか、お前は』

まあ言われるとは思つたさ。

自分で考えたつて今言つた事は正常とは思えない、異常だ。

『そんな事をすればビリになるかぐら』お前でも分かるはずだ。確かにやつてしまふ事は出来るしワシにとつてしてみれば容易い注文だ。だがな、もしそれでお前が死んだらどうするつもりだ?』

『…………』

『織斑千冬でも勝てるかどうか分からぬいようなレベルでしかもガンドム? 今のお前じや一撃を入れることでさえ奇跡に近い。ガンダムの装甲は確かに厚いがガンダム同士なら一撃が致命傷になるのは分かるはず。そうなつた場合はお前は勝率どころか死亡率の方が高いわ』

『…………』

『だから考へ直せ。強くなりたいのならまだある程度は強化してやる』

「それじゃあ意味が無いんだよ」

やつぱりこの爺さんは分かっていない。

そりや確かに下手をすれば死んでしまつかもしれない危険な方法よりも、傷一つなく確実に強さを手に入れられる安全な方法の方が理屈では良いに決まっている。

でもそれじゃあ駄目なんだよ爺さん。

強くなりたいのなら無茶をしてでも手に入れなければならぬ物があるんだよ。

「確かにそれも爺さんに頼ってしまえば簡単に出来るだろ?」

『分かってないのか?』

「でもそれじゃあ駄目なんだ。ちやんと戦い方も知つておかないと駄目なんだよ。いざという時のためには絶対にだ」

『何故そこまでいだわる必要性がある?』

「それじゃあ本能や戦いにおいての勘が磨けない」

『本能や戦いにおいての勘……じゃと?』

口調が一瞬戾つたが気にしない。

……やつと、戦いにおいて本能も重要な武器の一つだ。

「例えば相手が何を狙っているのか、それを気が付いて直前で阻止

できれば少なからず相手の動きというのは止まつたり甘くなつたりする。そんな隙を一気に付いて叩く事が出来れば一方的に有利な展開に勝負が持ちこめるだろ』

『つまりあれか。知識などは事前の勉強でどうにかなるが、戦闘においてのスキルは実際に訓練しないと得られないものもある……とこうやつか』

話が分かつてくれて大助かりだ。

それが分かれば俺の言った注文もやってくれるであろう。

俺は一切の嘘は言つていないし、今は主人公。

常にトラブルに巻き込まれたりするものだらう。

『……仕方ない。やってやるつ』

「すまないな」

そして一瞬辺りが光つたと思えば一枚の手紙が。すぐに読んでみるとこんな内容が書かれてあつた。

『お前の言う通りの物を作つた、地下訓練所への入り口はクローゼットの中。それと書いておかなければならぬ事がある。まずお前が使用する一機の機体にそれぞれの意思を設けた。これで訓練中に死亡するなどの事故は無い。それからお前がそちらの世界に行つた影響で多少世界が変わつてゐる。たとえば人物の抱いている思いなどだ。まあ伝える事はこれぐらい。達者でやれよ神より』

「……色々気になるがまあいいや」

俺はとりあえずクローゼットの中にある地下訓練所へ行く事に。何故クローゼットの中なかは無視。別に気にしなければいいだけの話だ。

さて、地下訓練所に着いた事は着いたが驚きのあまり声がない。まさかここまで完成度だとは思つてもみなかつたからだ。

広さは大体横幅が500メートル、縦幅が20メートルぐらい。ちなみにここでは受けた傷の八割が自動回復するらしい。

ホントにすげいと思つよ、神の力。

「それじゃあ早速訓練開始だ。 来い、『ウイングガンダムゼロ』

俺の呼び声に反応して一瞬で全身装甲が構築される。

俺が今装備したMSは赤を主体とし、黄色や青といったカラーが翼の部分などに使用されていて色鮮やかな全身装甲の機体『ガンダムウイングゼロ』

もちろん頭の部分も装着してはいるがちゃんと見える。

『よつマスター。 俺がウイングゼロだ』

「こきなりハスキーな声で血口紹介か。まあよろしく」

『おー。……おー、ガンダムも血口紹介しないよ』

『私が ガンダムです。これからよろしくお願いします、マスター』

こちらは急に俺の前に現れた ガンダム。  
カラーは白を主体として所々に黒などがある。  
どつちの色もバランスが取れてて綺麗だ。

「…… よ、お前の中つてどうなつてる?」

『マスターが入つていないので空洞ですがどうかしましたか?』

『どうしようゼロ。突つ込みたいのにスルーされやつ』

『ほつとけばいいんじゃないか?』

らしいでスルーすることにした。  
しかしこつまでも喋つてゐる訳にもいかないため始める事に。  
……今の俺でどこまでやれるか。  
それが取り合えず今気になる事だな。

ちなみに戦闘は次回に持ち越し。

## 第1話 訓練前（後書き）

次回、初戦闘です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1388z/>

---

【織斑一夏に憑依か……せめて強く生きていこう】

2011年12月5日18時59分発行